てと…そんなしちめんどうな福祉は私には合いませんので私はやっていないのであります。

★更に、私が視覚障害者と接するきっかけとなりましたのはボランティアセンターでパソコンボランティアと言う講習会がありました。現在、中途失明者の方々は殆んど点字は覚えられないのです。交通事故、糖尿病、高血圧などによる失明者がどんどん増加してくる中で私達はキーボードを覚えていますから「音声ワープロ」と言うものが現在、盲人の方々にブームになっているのです。それはデスプレイに出た文字を全て音声に変換してくれるものなのです。ですから私達が点字と言う媒体を使わなくともキーボードを使うことで会話は可能であります。そんなことから或る盲人の方にたのまれまして歳時記、単行本などのワープロを数ケ月かかりまして打ってさしあげましたところ、そのことが口コミで全国に拡がりまして、全国からお礼の手紙がさっとうしました。

鳥取の盲学校の先生からは、俳諧歳時記のワープロをフロッピーにコピーして頂きました。この種の本を読みますのは初めてです。前から読みたいと思っていただけに大変喜んでおります。自然を満喫することの少い私達も歳時記の季語を読むことで自然界に心を向けた文化的生活に役立てたいと思っております。学校の教材としても使えます。…と。

やはり私がしてやった事がどこかに役立っているのであると、私はそんなことで感動致しまして、更に色々深入りしました。いのちの電話を通じたり、こういった盲婦人大会の研修レポートを読んだりして、ほんとに新潟は住みよいのかと…。

やはり私達健常者が身体の達者のうちに何かすることが１つでもあるのではとそんな気がしましてやっております。特に最近思いますのは老人の問題であります。私自身は老人問題に拘わっていないのですが、ほんとに住みよいと言うのは老後に不安なく暮らせるのかどうかと、これは一つのもの差しではないかとそんな気が致します。

それで「そうしないで、こうして下さい」と言う本を作ったのです。それは何かと申しますと、盲婦人大会で全国から何百人と言う方々が新潟市においでになっちのですが、高校生も含めまして約百人位のボランティアの参加がありましたが、盲人に対して実際、「手の引き方」が判からないのです。どうやって誘導してさしあげたらよいのか、そのガイドブックがあるのかと思いましたら、殆んどありません。たまたま、私の兄がドイツのフランクフルト大学の眼科教授をしておりますことから、ヨーロッパにこの様なガイドブックはあるのかと聞きましたら、ベルギーの方で戦争で失明された方が作成されたエスペラント版がありましたのでこれを兄から訳してもらいまして１冊の本にして、日本に紹介したわけであります。

この小冊子を作りまして、今年１月新潟市内のマスコミの皆様に配布致しました。取り上げて下さったのは読売新聞社であり、全国の皆様から反響を頂き、そんなことで日本テレビ「心のともしび」出演依頼の話がありまして、全国放送になったわけであります。

テレビを見られた方、新聞を読まれた方から約500通のお手紙を頂きました。それらを読ませて頂いて「こうして下さいと言うことに私達は応えていないのではないか」と強く私は感じました。

５月20日放送の「心のともしび」をみました。聖書にふれるのが好きで時間が許されるとこの番

まれたのは1933年（昭和８年）で、今年62才となりました。私が小学校を卒業しましたのが昭和20年、丁度終戦の年で当時は国民学校でしたが、戦時色一色の時代に新潟工業高校（当時は中学）電気科に入学し、小学校６年、工業関係の学校６年と、それが私の唯一の学歴であります。それで昭和26年に学校を卒業致しまして、今で言えばＮＴＴ、当時の電気通信省に入社し、電々公社、それからＮＴＴと約39年間勤めさせて頂きました。そして平成２年に退職致しました。

私のおりました電々公社と言いますのは独占企業であり、経理状況が悪かったら何時でも値上げすればよいと言う役人の世界でしたが、私はそういった世界は性に合いませんで、やはり中小企業の考え方が全て必要であると、そんな勉強もして来たわけであります。

それで在職中に「新潟の明日を考える会」と言う地域作りの会を設立し、昭和63年ころ月２回公民館に賛同される皆様と共に学習会を行っておりました。それで欲が出まして平成３年新潟市議会議員選挙に立候補致しましたが、みごとに落選致しました。やはり世の中を良くするには行政に参加さなければという思いが強くあったのであります。しかし選挙には強力なバックが必要であることをしみじみと感じました。それは業界のバックと組合のバックであります。私のように正論だけで行動しようなんて考えている者にとりましては非常に厳しいものでありました。私は不思議と涙は出なかったのですが、私の家内と息子は泣いてくれました。そのようなことから家族に諌められまして世の中の人々の役に立てるのは、政治だけではないのだとそんなことを家族に教えられたのです。

去年までは今年の選挙に出ようという思いもありましたが、或る時、転機となったきっかけがありました。私には孫が２人おりますが、下の子が生来白内障でありまして、生後３ケ月で手術を致しました。そして、その私の息子とお嫁さんのことを考えますと、どうもじっとしていられないという気にかられました。それは白内障を手術致しました後、コンタクトレンズを挿入致します。もう「ギャー、ギャー」泣いていまして父親が手足頭をおさえて、母親が心を鬼にして白内障手術後の子供の目をひっくりかえしてコンタクトレンズを挿入するわけですが、その姿をみますと私の血をひいた子供でありながらこのような目に合うということは、やはり困っておられる方に何かをして差し上げなければならないという思いにかられました。そこで政治の世界に入って行動するよりも、困っている人の立場に立って物を考えたり、行動することも、世の中のためになるのではないかと考えました。本日はお許しを頂きたいのは「私も墓場まで持って行かなければならない秘密はいくつかありますが」今日はそういうことを抜きに致しまして仮面をかぶった話をさせて頂きますのでよろしくお願い致します。

私は17才頃より川柳が面白くてやり始めたのですが、それも物事の見方をまともな方から見るのではなく、皮肉の方から見ますと、上から見るのでなく下からみるとそんなことになっているよう

で、一時期は熱もさめましたが、又最近、川柳をやり始めました。

平成７年10月７日、三条市立図書館で川柳大会がありまして幸運にも中央公民館長賞を頂きましたが、そんなことで私は恐縮致しております。

私の人生も少し変わった人生を歩むのも面白いであろうと私も川柳をやる位ですから、やることは皮肉ぽくて、よくぽっくり寺へ行って、ぽっくり死のうと言う人がおられますが、私はそんな生き方ではなくて、生きている間に相当に死ぬ苦しみを味わってから死にたいとそんなことを私は考えております。

それは何如かと言いますと、私の父親はもう亡くなりましたが「胃潰瘍の手術」を受けたとき、私の兄―フランクフルト大学眼科教授をやっております。―が大学のインターンの時、大学病院に入院して手術をしたのですが父親の言いますことに「もう医者としてやることはないのか」と言う手術後の苦痛に耐えながら言った言葉が忘れられません。

とかく痛いときは「痛い、痛い」と言いますが、その苦しみに耐えることはたいしたものであると思いました。それなら私は父親に負けないように苦しみを耐えてあの世へみやげ話にもって行きたいと、私は親父に対して、そんなだいそれたことを考えております。

★そのように変わった人生を歩もうということから「いのちのでんわ」の話のＰＲをさせて頂きます。新潟はほんとうに住み良いのか……。新潟県の自殺率は日本一でありますことをご存知ですか。私は「新潟いのちの電話」の開設の時からお手伝いをさせて頂いております。

今、交通事故で亡くなるかたは全国で年間約１万人で自殺は2.1万人といわれておりました。ですから色々、福祉だ何んだかんだと言ってたすきがけのオバサン達が一生懸命になっておられますが、それよりも深刻の問題が私達の周辺にありますのに以外と忘れられがちであります。

底辺に１人の方が自殺される時、既に100人の方々が自殺を覚悟されておられると言われております。ですから、底辺を如何にもち上げようかと考え、このようなことに拘わった動機であります。

全国の自殺する方々には３つの山が統計上みられます。25才（青春の悩み……）、55才（退職近くの悩み）、70才（老人の孤独、寂しさ……）に山がみられ色々なことが想像されます。しかし新潟県で特有なのは35才の男性にピークがみられます。――30才台の男性の方々に「いのちの電話」への相談が圧倒的に多いのであります。これは「職業をもって、或る地位についたが、どうもうまく行かない」などが背景に想像されます。「いのちの電話」の運営資金は年間1,600万円程が必要とされています。これらは全てボランティアの方々の協力で会費で賄われております。

新潟県の離婚率は新潟県は日本一低い――いかに家庭の問題に対して耐えている人が多いかといえる。又、登校拒否は日本一多いという数字があります。そのようなことから見ますと、はたして「人の心」はあまり住みよい新潟ではないのではといえる１つの例であろうと考えられます。

★それから神覚障害者と拘わりましたのは去年新潟市で盲婦人の研修大会があり、全国から600人程のお母さんが自分達の自立に関して経験を発表し合い研修されたわけですがこれを皆様が見えない目で点字をなぞりながら発表されておられました。

鳥取県の或る盲人のお母さんの発表で、とかく私達が福祉だ何んだと言いますと過保護になり過ぎます。盲人の方々と言ってもそれは自分で自立して生活しようと努力されている方が多いのです。私が感動しましたのは、私の住む米子は、市民一斉清掃という行事をしています。路上の空き缶拾いや草取りが主な作業なのですが、人並みに出掛けます。そして「一番草の多いところへ連れてって」とお願いするのです。例えば、今盲人の方は健常者よりも機能が劣っているから、劣った機能で甘んじているのでなくて機能が劣っているからこそ「何か」をしたいと言う盲人の方が殆んどなのであります。実は、ここにあります「ウサギの人形」を或る盲人の方から頂きました。これは盲人の方が作られたものです。ところが目が黒いのです。これは普通ならウサギの目は赤い目をつけるべきなのですが色の識別が出来ないのか、こういう目が欲しいと言う願望なのかしりませんがこの「黒い目のウサギの人形」は私の宝物です。

私は去年、盲婦人大会を手伝ってくれと言われまして盲人の方からレジメを頂きました。それは第40回全国盲婦人研修大会となっておりました。そこで第40回と言うのは47都道府県の40番目かと申しましたら、「そうだ」と言うことでした。ですから新潟県の福祉は県の政策、三条の政策にもあがっており、それぞれ福祉の目標を行政として持っているものと思いますが全国的にみますとそんなレベルかなあとがっかりした次第であります。

そこで何をするのか判かりませんでしたが、「お手伝い致しましょう」「何をしたらよろしいのでしょうか」と申しましたら、「県民会館のステージをつくってくれと…」「今どう言う構想をおもちですか」とお聞きしましたら、紙に書いて議題がぶらさげられること、照明は盲人ばかりであるから、そんなものは不要であると、「録音はどうするのですか」と言いましたら、「誰かカセットテープを持ってくるだろうから…」とそんな話でした。全国からおいでになる盲人の皆様方にそんなみっともない話をしてもらっては新潟県の恥だと思いましてステージ作りは「私達がやりましょう」と時間はいくらもなかったのですが、まず、資金集めからやりました。約20万円位あれば何んとか出来るのではないかと約200通位の協賛依頼の手紙を発送しましたところ、何んと60万円も資金が集まりまして気を良くしたのですが、その時感じましたのはゼネコンさんは全く協賛頂けず、スーパーや街の皆様が主として協賛して下さいました。従って、私はゼネコンさんの言う「福祉、福祉」と言うのは建物をつくるだけが福祉かと強く感じました。「行政がやっている福祉、ボランティアがやっている福祉」と言うのは「そうしてやっている」のが福祉であると思います。ところが盲人の方々と拘わってみますと「こうしてほしい」と言うことに私達はほんとに応えてくれていないのです。

私達は社会福祉協議会とか福祉活動はやっておりますが、それは上から来たものを二番煎じをしてそれをいかにやるかと言うことだけで、ほんとうの福祉、ほんとうに困っている人、弱い人のためにそれで十分なのかと、それが私の疑問であります。そのようなことで私は独りでこんなことをやっております。そのような団体には所属致しておりませんのは、規約があって、何んとかがあっ